

生物多様性なごや戦略 第1回策定会議 会議録

1. 日時 平成20年6月19日（木） 午前10時00分～午後12時20分

2. 場所 名古屋市公館 1階 レセプションホール

3. 出席者

(1) 生物多様性なごや戦略策定会議委員

< 専門家会議委員 >

氏名	所属・役職等
安田 喜憲（座長）	国際日本文化研究センター教授
向井 清史	名古屋市立大学大学院経済学研究科教授
海津 正倫	名古屋大学大学院環境学研究科教授
芹沢 俊介	愛知教育大学自然科学系生物領域教授
下田 路子	富士常葉大学環境防災学部教授
土屋 泰広	(株)コンボン研究所取締役
千頭 聡	日本福祉大学国際福祉開発学部教授
香坂 玲	名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授

< しみん検討会議世話人 >

氏名	所属・役職等
千頭 聡	(専門家会議委員)
香坂 玲	(専門家会議委員)
広田 奈津子	生物多様性アドバイザー
新海 洋子	なごや環境大学実行委員
内木 哲朗	中津川市職員
矢部 隆	愛知学泉大学コミュニティ学部教授

(2) 事務局出席者

加藤環境局長 始め 1 2 名

4. 議題及び意見の要旨

(1) 生物多様なごや戦略の策定 (資料に基づき事務局から説明)

・意見の要旨

委員名	意見
安田	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地球環境問題というと、CO2の増加という問題以上に重要なものがこの生物多様性である。 ・ CO2の増加による地球温暖化だけが喫緊の課題として取り上げられる背景には、排出権取引によって市場原理主義に乗りやすいという面があると思う。 ・ 生物多様性がほとんど重要な問題として取り上げられない背景には、この問題が市場原理の経済原則に乗りにくいという、極めて大きな問題があると思う。 ・ 人類の生存にとっては、CO2の増加も大変大きな問題であるが、それ以上に自分たちの周りを取り囲む生きとし生けるものの命が失われていくという、そのことのほうが、人間の命にとっては極めて重要な問題であると考える。 ・ COP10に向けて、私たちはこれから2年間、どのような戦略を立てるか、これから皆さんの英知をお借りして議論を進めていきたいと思うので、どうぞよろしく願いしたい。
向井	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戦略において考えたいと思っているのは、生物多様性というのは種とか生態系とか、我々を取り巻く環境とか、客体的な条件の問題という問題もちろんあるが、それを我々の主体、人間との関係の中で生物多様性というのをどういうふうに考えていくのかということを中心とした視点の1つとしたい。 ・ もう1つは、マーケットに乗りにくい、市場メカニズムに乗りにくいという面があるが、我々の生活も含めた大きな意味での経済的な資源循環の中で生物の多様性というのを考えていかないと、なかなかお題目に終わってしまうということがあるので、多様性を維持することが、我々の生活も含めた経済的な循環の中でどういう意味を持つかという視点から意見を出せればと思う。
海津	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名古屋市史の編集に携わっており、その自然編の責任者をやっている。自然編の本文は大分前に出たが、先日資料編が刊行された。生物を中心に、名古屋市内の生物の特徴、それからどんな種類があるのか、そしてそれがどこでどのように確認されたかという目録もつくった。これは、生物多様性のことを考える上でも非常に貴重なデータになり、そういうものをベースにしなが、今後のなごやの戦略を考えていくことに使っていただけるのではないかなと自負している。 ・ その資料編を取りまとめる中で、名古屋市といっても、あるいは名古屋周辺の地域も含めて、いろんな自然の特徴を持っている。もう既に都市化した地域もあれば、例えば藤前干潟のように、干潟としての環境が非常に特徴的であるところもあれば、熱田神宮の森のように、照葉樹林の森が広く残っていて、古くからの名古屋周辺の森の様子を知ることができる。あるいは守山の奥のほうの東谷山のように、少し名古屋の中では高い、あそこにはカモシカまでいるという、非常に自然豊かな場所も結構ある。こういう名古屋の自然を我々は誇りに思うと同時に、それが今後なくなっていくように、あるいは回復していくようにするにはどうしたらいいかということを、この会議で検討させていただければと思っている。
芹沢	<ul style="list-style-type: none"> ・ この地域で生物多様性に関する中で何が一番問題かというと、これは基本的に基礎情報を蓄積するシステムがないということである。 ・ 議論の基礎として、何といっても正確な事実情報の蓄積が大事である。これが名古屋あるいは愛知県には決定的に欠落している。名古屋には自然史系の博物館もなければ、そういう生物多様性に組織立って取り組んでいる大学もない。これをまずどうにかしないといけないということがあると感じている。 ・ 特にこういう問題について、広域の関連自治体、特に愛知県との連携というのを考慮してほしい。名古屋市民は決して名古屋市内の生物多様性だけ利用しているわけではない。生物多様性を守るためには、連携が必要である。 ・ 生物多様性の保全というのは難しいというけれどわかりやすいものだという話がさっき出たが、やはり

	<p>実はこれはかなり難しい問題である。保全の必要性というのを理解していただく必要があると思っている。</p>
下田	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋には全く縁がないが、名古屋もまだ少し田んぼが残っている部分があって驚いたり、東側にはため池が、随分減ったけれどまだ辛うじて残っているということなので、そのあたりで何か発言できるかと思っている。 本当の人の手がかからない自然というよりも、私がかかわってきたのは、ため池にしても水田にしても、人が関わったことで結果的に多様性が保たれていた環境が多いので、今回都市域の生物多様性を考える際にも、そういう立場から役目が果たせるかと思っている。 多様性というと、例えば水田に雑草がたくさんある、それは多様性が高いからいいととらえる場合もあると思うが、農家の方にとっては雑草はないほうがいいのか、害虫がたくさん発生したら多様性が高いからいいのかといったら、稲の害虫だったら、これをいいと考えるか、あつたら困るという存在かと、なかなか立場が違うといろいろな意見が出ると思う。例えば江戸時代から戦後すぐぐらまでは、雑草とか害虫がたくさんいて多様だった。でも、そのほうがいいのかというと、正直言って都市域の方、そんな生活は嫌で、快適なほうがいいに決まっている。だけど多様性も大切だということで、自分でもなかなか頭が整理できないが、私も一緒にここで勉強させていただきたいと思っている。
土屋	<ul style="list-style-type: none"> 例えば、実際に計測を随分やったが、木がどのくらいCO2を吸っているか、NO2を吸っているか、愛知県の環境部と一緒に、共同で街路樹の計測を実際にやってみた。大体午前中から午後一番が一番活発で、2時過ぎるとぱったりとCO2を吸収しない。一番いいときで、真夏の炎天下で測ったので、ぴったり一致するかどうかかわからないが、7%ぐらい、通った風の中にあるCO2及びNO2を吸収する。午後はぱったり、日がさんさんと照っていて、全く息をしない。若干やっているが、非常に落ちてしまう。2%とか1%、そういうことになる。そういうのも始めてわかった。実際とちまたで言われていることを比較しながら考えていかないと間違うということを痛切に感じた。 今コンボン研究所で私がやっているのは、環境というのが1つ大きなテーマで、植物バイオという観点でいろいろ研究をしているので、そういう観点でいろいろご紹介及び皆様と一緒に研究をさせていただけたらいいと思う。
千頭	<ul style="list-style-type: none"> 多様性を損なっているラオスにあるヒバ類や何かは、日本に入ってきたり、ヒバじゃなくてヒノキの類だが、台湾ヒノキという名前日本に入ってきて、神社の仏閣の修繕に使われたりしている。それが実はラオスの森林を大幅に破壊しているという原因になったりしており、物の流れというか、我々の食生活も含めて、まさに地球でつながっているなということを、今国際開発系の仕事をしているので、痛感している。 名古屋ではなごや環境大学という仕組みを少し動かすことをお手伝いしており、生物多様性というの、何をもちて戦略というのかということがきくと後で議論になると思うが、多分なごや戦略は、だれがそれをどう担って動かしていくのかということも全部セットにした戦略でない、最初にパンフレットだけつくったのではどうしようもないかなと痛感している。 例えば御器所の大根なんていうのは、特に珍しい品種ではないか。御器所で大根がつくられたということは、まさに名古屋の昔の資源循環の中にきちっと入っていたと思う。名古屋を少しさかのぼりつつ、暮らしの中での資源循環と、その中で維持されてきた生態というのか、それは野菜というのかかわらないが、少し視野を広げて考えていくことが必要かと思っている。 多分この中で議論できないことで、一番大事だと私が思っているのは、生物多様性は表裏一体で実は土地利用の問題がすごく大きいと思っている。残念なから日本の法制度の中では、希少種を守るという意味で一定の土地利用に対する規制はあるが、多様性を守るという視点から土地利用をコントロールしていく仕組みはほとんどないと思う。日本はすごく土地利用が、ある面で厳しいが、ある面では本当にザルだと思う。そういう意味でいくと、生物多様性というの、ある市域で考えていけば、本来は土地利用のあり方に踏み込むべきだと思うが、これは極めて踏み込みにくいと思う。ちょっとそれは頭

	<p>の片隅に置いておいたほうがいいのかなど考えている。</p>
<p>香坂</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ CBD条約事務局にいたときに議論になったが、1つには政府の代表の方々がそういった条約の場で話し合われるということが1つと、それを機会にさまざまなセクター—民間セクターの方、市民の方、そして学者の皆様の協力を仰ぎながら、どうやって生物多様性というものの理解を深め、非常に複雑な問題ではあるが、数値目標を入れていくのか、あるいはそういった危機があるということに対してどういう態度をとっていくべきなのかということについて理解を深めていく、そういった2つの側面があるかと思う。政治的側面と、知識、理解、普及—CEPAと呼んでいるが、そういった普及の側面もある。 ・ 日本には、特に文学界には、四季や草花、あるいは動物といったものが非常に重要な要素として入っているのかなと感じている。これは恐らく、万葉とかそういったところまでさかのぼっていったら、そういった四季折々、季語とかそういったものが入ってくるような伝統が脈々と受け継がれてきたのかなと考えている。 ・ 一般の人々にも親しみやすいような形で文学や映画などいろんな活動をしていくのもCOPの活動であり、また戦略の中の1つの活動であるのでは。もちろん専門的な議論を深めて、それに基づいて政策に対して提言をしていくということも非常に重要な要素ではあるが、片や市民の方々や県民の方々にも理解を深めていただく貴重な機会になっていくのではないかな。これは、加藤局長のお話にあった自然とのつき合い方、こういったものとも大いにかかわってくるだろう。本日お集まりくださっている皆様、関心のおありの方が多いかと思うが、その方々を通じて、これまで余り関心を持って来られなかった方々にどうやってすそ野を広げていくのか、これが我々、千頭先生と同様に、市民活動の世話人ということになっているので、そういうところが1つ課題になってくるのかなと考えている。 ・ 千頭先生の問題提起のなかであった一例の土地利用については、COP8—第8回締約国会議では、環境アセスメントに対して生物多様性の要素を組み込んでいくようにという決議を既に2006年にしているので、間接的ではあるが、環境アセスメントに対してそういった要素が促進されていくということも1つ、例えば条約の具体的な提言としてももう既に出ているのかなという気がする。 ・ ぜひとも専門的な議論に加えて、一般の方々に対してのどういったコミュニケーションを図っていけばいいのか、こういった点を考えていければと考えている。
<p>広田</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今回のCOP10に関しては、消費者、市民のプロジェクトをどうつなげていくかというところに重点を置いていきたいと思っているが、そうした海外での破壊を見ても、日本が食料自給率を高めること、資源の自給率、エネルギー自給率を高めることが地球規模での生物多様性にとっても大きな影響を持っていることを確信しており、区ごとの、例えば名古屋16区ごとの自給率を上げていこうとか、もっと言えば地域の町内会の自給率を上げてもらうとか、そうした市民、行政、企業も総出で、地球への迷惑な行為をちょっとでも減らしていくということを提案していきたい。 ・ 自然、森が、精神面でとても恩恵をくれているということを、今の大人、私の父の世代の人たちは余り意識していない方が多いが、私たちの世代、なくしたものだからわかるのかもしれないが、森がくれた精神面への恩恵というのは物すごくある。虐待を受けている子供だとか、そうした人間関係でトラブルがあったときにいかに自然がそれを助けてくれているか、形や数値にはしにくいけど、そうした価値をもう一度文化面で見出していくところが大事だと思っている。 ・ 生物多様性アドバイザーとして、他のメンバーとドイツと一緒に見てきたが、ドイツは森を保全できるFプランがある。地図を広げて、Fプランを立てて、この森を保全する、ここは工業地帯、ここは住宅を開発してもいい土地ということで分けている。それが日本で実現しにくいのは、民有地の緑地が多いということが1つあると思うのと、民有地の緑地をどう守っていくか。森がお金にならないから切るしかなかったり、森が好きでも遺産相続ができなくてマンションにするしかなかったり、そうした形でこの30年、50年、とても急速なスピードで森が消えている。今後50年で見据えたときに、企業のカーボンオフセットだとか、CO2を吸収してくれる数値を出して、50年で見たときの経済価値を出してもらう。マンションを建てた場合にはこれだけだけれども、50年で見たとき、カーボンオフセットも含めてこれだけの経済

	<p>価値があるというものを、例えば民間が自分の民有地の緑地をカーボンオフセットに登録して、企業がそうしたところにカーボンオフセットとして資金を、森の管理費に使うために資金を出して、そうした形で日本らしい森の保全をしていけるんじゃないかということ話を話していた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 市民の立場は、やっぱり私も香坂さんと同じく人ごとじゃないんだよということを伝えながら、市民のプロジェクトを盛り上げていきたいと思っている。
<p>新海</p>	<ul style="list-style-type: none"> しみん検討会議でやりたいと思っていることが4点ある。まだ抽象的なので、今後皆さんの知見や経験とあわせ、実現できたらと思う。 1つは、エコロジカル・フットプリントという指標がある。人間の消費生活、経済活動がどれだけ地球の面積を踏みつぶしているかという、農地とか漁業の水域、海域に対する私たちが利用している指標をあらわしたものである。先ほど名古屋の自給率の話があったが、名古屋の人たちが自分たちの経済活動とか消費活動に土地を使っているかということを示してみたいと思っている。名古屋のいろんな環境の中で名古屋市民が一体何人住めるのか。1人住めるかどうかかわからない状態かもしれないが、その中で海外とか、自分ところとは違う町の人たちの恩恵を受けて暮らしている、その人たちのことを思って暮らしを立てているかということのメッセージをつくってきたい。特に、最近限界集落といって、愛知県でもたくさんあり、山村が本当に消えかかっている。限界集落の方々の森林資源とか、いろんな資源の生物、リソースがある中で、それを都会の人たちはどう活用するとか、一緒に守りながら、利用しながら豊かな生物資源の再生をつくっていくか、という視点での生物多様性の観点での事業、プロジェクトをやってみたいと思っている。なかなか自分たちの町以外のことの想像ができない市民生活の中で、少し離れた人たちの暮らしとか、持続可能性というものを考える機会を設けてみたい。 もう1つは、企業の方々と、物をつくるとき、何かサービスをするときに、生物多様性とか、生物循環のもとでどれぐらい負荷をかけているかとか、そういうことをきちっと指標をつくって検証できるようなものを市民と企業と行政と、名古屋らしいルールとしてのガイドラインをつくってみたいと思っている。例えばみそ煮込みでもエビフライでもいいが、そういうものがつくられるまでにどうふう生物、環境に負荷をかけているのかということを考えながら、その多様性の価値をみんなで学び合うということをしていきたい。 3つ目は、なぜ環境教育をやり出したのかを振り返ると、小学生のときに担任の先生が1日1草というプロジェクトをやってくれたが、今でもそのときに毎日探した草というのは覚えている。そういう小さなときに、親や友達と見たり探したものというのはすごくインパクトがあり。「自分の地域にこんなにたくさんの草があるんだ」とか、そういう発見はすごく重要だと思っている。子供たちが何気なくかわかることでそのことに気づくようなプログラムを市民と、また企業の方、行政の方と、できたら教育委員会の方々と一緒にやっていたらと思う。 4点目は、戦略はツールにしたい。紙ベースではなくて、私たち市民がそのことを行動するためのツール、使いやすいものにしたいと思っている。多くの市民の方の意見を聞き、企業の方もそれを見ることで自分のところの経済活動が少しでも変わるようなデータなり、指標なりが書かれるものにしていきたいと思っている。
<p>内木</p>	<ul style="list-style-type: none"> 中津川市北部の加子母、付知、川上という町村は濃州三カ村といわれ、江戸時代は尾張藩の領地で、非常にすばらしい木曾ヒノキを産し、尾張藩としての位置づけも非常に高い場所であった。例えば400年前の名古屋城の建設に当たって材料が出ていったという記録もある。我が家にも古文書として、いろんな記録、名古屋との関係、川上と川下の関係、そういった資料が残っている。今後、生物多様性の文献として参考になるかわからないが、利用できる部分もあると思う。 今山へ入ると、ヒノキならヒノキだけ植わっている、スギならスギだけを植えている、そういう山がふえている。山の中でも里山がないというのが現実である。それを何とか再生していきたいというのが私の希望。そのために1つのプロジェクトとして、苗木を名古屋市民に配っている。これを2～3年町の中で育てていただき、大きくしてから中津川市へ持って植えていただくプロジェクトで、本丸御殿の寄附をさ

	<p>れた方に記念でお配りしている。植えた木は、将来、本丸御殿が100年後、200年後に文化財となったときに、その修復材として使うために備える林として、御殿備林という命名をして、森づくりをやっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 森づくりも、できればヒノキと一緒に広葉樹、照葉樹と一緒に植え込んでいき、針葉樹の山には広葉樹を、広葉樹の山には針葉樹を植えていくような、そういったことで多様性のある、とにかく複雑な森をつくっていくというのが、これからの山づくりのテーマというふうに思っている。複雑な山をつくれれば、水もよくなり、水質もよくなる。子供も入ってくる。タヌキやキツネ、サルなどの生物が里へおりてきて、農作物を荒らすというのは、森の中にそういった木の実がないとか、食べるものがない、そういった状況をつくっていると思う。中津川市の持っている山はできるとしても、一般の林家がお持ちになっている山をどう変えていくかというのが1つの課題だと思う。 年間2万人の名古屋市の小学校5年生が中津川市の野外教育センターで自然体験をしているが、その2万人の子供たちが1本ずつそういった広葉樹、照葉樹を植えていだけでも、水源を守るというプロジェクトとか、大切な部分も担えると思う。まず木を植えていくという、森をつくっていくという活動が一番大事な部分になっていくと思いつながり、これからも続けたいと思っている。
<p>矢部</p>	<ul style="list-style-type: none"> なごや戦略の策定会議にあたり、名古屋の市民が、名古屋を含む、名古屋に影響を与えている周辺地域を含む地域の生物多様性に正面から向き合わなくてはいけないと思う。COP10を誘致したことで、COP10を誘致するに当たって万博がうまくいったのだ、それからおもてなしの心があるのだ、いろいろところでそういう話を聞くが、名古屋を含む地域が本当に日本の国内でも生物の多様性に非常に富んでいるということに触れられたことが全くないので、非常に残念である。 名古屋近辺の東海地域というのは、トカゲでみると、この地域を境にして、西日本と東日本のトカゲというのは全く遺伝的交流がない。潜在的な別種であるというふうな言い方までされている地域である。両生類でいうと、カスミサンショウウオの東の限界がほぼこのあたりである。オオサンショウウオもこのあたりが限界であり、名古屋市内にはナゴヤダルマガエルという、名古屋という名前を冠した両生類までいる。両生類でそれをかいま見ただけでも、それだけのいろんな生物の多様なおもしろさがあるのに、それに全くだれも目を向けようとしていない。 そういうようなことを調べる人の層、人数というのが非常に愛知県というのは少ない。首都圏とか京阪神と比べても非常に少ない。この地域の生物多様性の実態、現実に向き合うこと、これが非常に重要だと思う。そのために必要なことは、我々みたいな個別の専門家をうまく活用していただいて、市民の方で、自分の興味のある生き物でいいですからそのことを調べるができるような市民をなごや環境大学とかそういうところを通じて育成すること、これが非常に大事だと思う。 そうやって蓄積された情報、それを収集して、それから責任を持ってストックして、それをもとに教育啓蒙するというセンターというのはどうしても必要だと思う。愛知県、東海地方を眺めてみると、どこにもない。特に愛知県という東海地方の中心地になるところにもそういうセンターが全くない。県にとりあえず任せておけないということであれば、名古屋市にそういうようなものがあったらいいと思う。愛知県全域を対象とした場合のように、やれ大きな川だ、やれ大きな海だということを相手にしなくていい。コンパクトで本当に機動性がある、本当に市民のためになるような、市民が多様性を自覚するためのきっかけとしての箱物があったらいいんじゃないか。 生物多様性に向き合うために、1つは市民をとにかく育成する場所を設け、それから証拠として残しておく資料をストックしておく場所が欲しい、この2点を申し上げたい。

(2) 生物多様なごや戦略の検討事項 (資料に基づき事務局から説明)

・意見の要旨

委員名	意見
海津	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名古屋市史をつくるときに、市の歴史、要するに自然環境がどう変わってきたのかということ踏まえた市史ができないかと考えた。本編では地質や地形、災害のあたりに関しては、割合と自然の歴史を踏まえるような形でうまくまとめられが、なかなか生物のところ難しい。資料編も、まずは現状を把握しなければいけない。きちんとデータを整理しなければいけない。そのデータをきちんと確認するところ、やはり難しいところもたくさんある。移り変わりや変化を追うことが困難だったと思うが、やはり将来の生物多様性のことを考える場合には、これまでどのように移り変わってきたかということを見据えなければいけない。 ・ 「昔のなごやと生物多様性」というふうに書かれていますけれども、それには生物だけ見ているのではなくて、その生物を取り囲む環境といえますか、先ほど土地利用という話もありましたけれども、その地域自体が変わっている。森が削られてどんどんマンションに変わっていくとか、そういう地域変容と生物の変化とをうまく組み合わせた形で名古屋あるいはその周辺地域を含めてどのように変わってきて、現状はどうなのか、それが将来どうなっていくかということを検討しなければいけないのではないかと。 ・ 例えば地域の変容に関して、土地利用や地形などは、我々は把握する手段をいろいろ持っている。過去の地図や空中写真を使ったり。ただ、個々の生物については、なかなかそれを知る機会というのは難しい。それは、その地域で育った人たちが、今先ほど言われたように、30年前にはトキがいたとか、そういう話が断片的にいろいろとあると思うが、それを集約するシステムが必要ではないか。その集約するというのが、市民の皆さんのそれぞれの持ちの情報を集めていくという形でできるのではないかと。そこで、この戦略会議のさっきの構造ですけれども、この会議と、市民の皆さんの部分、そこを融合させて、市民の皆さんの持ちの情報をうまく組み合わせながら全体としてまとめていくという、そんなうまいシステムができればいいのかなと思っている。
香坂	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境分野の1つの反省点というのは、指数、動向というものをつくっていくときに、地域によっては時系列のデータさえもとれないようなものがあるということだ。 ・ もう1つ、環境といったときに、生物種というものをだけ取り出した動向にしてしまうのではなく、社会、経済、環境という3本セットで見たいと思う。あくまでも人間を中心にしたものではあるが、例えば生活の豊かさの指数など、持続可能な地域とか都市の指数といったときは、環境だけを取り出すのではなくて、社会と経済の相関の中でどういうふうな動向を示しているのかということ議論する大きな国際的な流れがあるように考えている。 ・ 来週シンガポールで都市サミットというものが開催されるが、そちらでは、シンガポールが今進めている都市の中で環境、都市にとっての環境とその動向を示す指数というものをどうやっていくのかということが1つの論点になる。もちろん3Rとか廃棄物のことも議論にはなるが、環境の側面だけではなくて、まずはデータの客観的な積み重ねと、環境を含めたさまざまなほかの側面も含んだ形で議論していく必要があるんじゃないかという国際的な議論の流れがあることをご報告させていただく。
土屋	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特に市の運営に対しての提言だが、過去の市がどういうことを考えて開発なり社会をつくらうとしてきたかということと、今までの生物多様性がどうなっていたかを、もう一度きちんと整理しておく必要があると思う。その中で因果関係を明確にした上で進めていく必要があるのではないかと。そういうことと、市民活動及び市といえますか、我々市民がどういう価値観をもって動いているか。それがいいのかどうか。多分こういうことをやっていると、かなり痛みを伴わざるを得ない可能性があるのと、そういうことが本当に理解できるのかについてよく考えたストーリーづくりが特に必要だ。これは資料4の話です。 ・ 資料5については、検討の流れだが、市民の検討会議というのがもう1つある。そことの関係が残念ながらここに記載されていない。ここで話をした内容がどういうふう流れていくのか、逆に市民の中の検

	<p>討会議で話された内容がどういふふうフィードバックされるのか、非常に大事だろうと思う。この辺りをもうすこしはっきりさせる必要がある。</p>
下田	<ul style="list-style-type: none"> 先ほどのご意見ですが、昔の資料、古文書が案外物になるものがあるという経験をしたので、ちょっとそれをご紹介したい。 東広島市に最近合併しました黒瀬町という小さい町で、合併を控えて町史をつくるということで、ありきたりの町史ではおもしろくないというので、環境にかなり重きを置こうということで関わることになった。そのときに古文書を読める研究者と一緒にいろいろ資料を見まして、そのときに江戸時代の資料で、書上帳とか産物帳というのが、私は読めないような墨で書いたものが農家の蔵からいろいろ見つかった。その産物帳の中に、江戸時代の末期に、例えば動物ですとキがいたとか、カワウソがたかさんの村にいたとか、オオカミがいたとか書いてある。植物も、黒瀬にはないオニバスとかミズアオイとかいうのがちゃんと書いてありました。専門家が書いたわけではなく、村人が産物という視点から書いてはいるが、ちゃんと書いておまして、びっくりした。そういうことを把握するには、生物の専門家と古文書の専門家とが協力すると相当おもしろいデータが、まだ埋もれているのが発掘できるかと思った。名古屋がこんな大きな都会になるまでの村々での資料などが、恐らくまだ埋もれているものがあるのではないか。そういうところに案外使えるデータがあるのではないか。 あと、絵図も出てきたが、それを見ると、昔は自然が豊かだったと思うかもしれないが、じつはほとんどがはげ山。木があつたらアカマツ、あとは草刈りをしてた草地で、江戸時代は自然が豊かだったかなという、そうじゃなくて、森がなかったとか、そういうこともいろいろわかりまして、とてもおもしろい体験をさせてもらった。古文書に全く生き物のデータがないかという、かなりある。地方名がつかわれており注意が必要ではあるが、昔の人はそれなりの鋭い観察をしていて、鳥などは物すごくたくさんの種類を認識していたことが分かった
矢部	<ul style="list-style-type: none"> 昔の高度経済成長以前のころの資料が大事ということで、当時の写真を持っていらっしゃる方の写真というのは集積したい。 古文書という話が出ましたけれど、まさに私が今注目しているところで、専門家が古文書を読める人に解説してもらって読めば、何かというのは相当正確にわかるような気がする。 それから、絵図なんか見ると、それこそ徳川美術館にある円山応挙のかいた屏風柄を見ると、これは年食った雄のイシガメだとかわかるぐらいまでとてもよく写実的にかいてくれているので、それに注目すべきだと思うんです。 もう1つ追加したいのが、考古学的な資料として、最近環境考古学とか動物考古学とかいうことで、土器とか石器とか骨角器以外で環境を知るために出土物を分析しようという流れがあり、愛知県の埋蔵文化財センターは、全国の埋文センターの中でも比較的それに熱心に取り組んでいる場所なんです。そういうところからの資料も得たい。 私は、名古屋市を含めての愛知県内の遺跡から出土したカメの報告書を何本か書かせていただいているが、とてもおもしろい。今現在クサガメが分布している場所でも、中世ぐらいの遺跡だとイシガメしか出土していないという現象があらわれたりして、昔イシガメがいたところでも、だんだん新田開発が進んでクサガメにかわっていった。最近の状況を見ると、アカミガメにかわってきたという状況が見えたりして、そういう資料というのは集積していくと、本来その土地の環境の構造の中にどういふふうな生き物が当てはまっていくのかということの分析にとってもプラスになる。そのような資料を集積する場所が欲しいなという気持がある。
内木	<ul style="list-style-type: none"> 古文書だが、実は我が家に3万点ぐらいの古文書が20年ぐらい前に出てきた。全部が関連することではないが、例えば名古屋から中津川のほうに、こんなものが欲しい、例えばカモシカの皮ですとか、熊の胆、それから珍しいものでは猿の頭というものもあるんですね。そういったものをたる2槽につけて名古屋のほうに送り出す。山の幸はかなりいろんな形で出ている。そういう記述が残っております。食べ物といふか必要なもの、そういった生活必需品、山からかなり多様なものが出てくる。ですから、町の中で集

	<p>められないもの、そういったものを山に求めていったと思いますし、大きな意味では、そういった100kmも離れたー100kmも離れていませんけれども、非常に里山的な使い方、非常に大きな「なごや」という枠で考えていましたけれど、そういった形で、流域で共存共栄していたようなことと思います。そんなようなことも使えれば使っていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> • まだ解読率が非常に低いものですから、これからいろんなことがわかってくると思います。名古屋との関係に参考になればと思います。
向井	<ul style="list-style-type: none"> • いろいろ資料の発掘も重要だと思いますけれども、戦略の骨子の中に入っている環境教育のところ、資料をどう利用するのかというか、環境教育というのはどうしても小中学生の子供に教えるというイメージがあるが、この地域の高等教育機関として、そういうデータみたいなものをどうやって利用して先端的な研究につなげていくかという、そういう視点がないといけないと思う。そういう意味で高等教育を担っている、民間の研究所を含めたようなコンソーシアム的なものをつくっていくという視点を戦略の中に入れていただきたいなと思います。 • もう1つは、地産地消のビジネスモデルというのが必要だが、なごやの今の現状を考えると、地産地消のビジネスモデルでできる範囲もおのずから限界がある。こういう言い方をするとちょっとおかしいかと思いますが、名古屋市がグレーター・ナゴヤ・イニシアチブの先陣を切るということであれば、もう少し世界的な視野に立ったような、CO2だとCDMみたいな考え方がある。だから、名古屋だけで考えるのではなくて、流域圏あるいはもうちょっと広い範囲を考えたような、その中でも名古屋市の役割のような視点を入れていく必要があると思う。
芹沢	<ul style="list-style-type: none"> • 先ほど古文書の話が幾つか出ましたが、名古屋圏は古文書に関しては極めて恵まれている。これは、専門家が実際大勢いたからだ。例えば水谷豊文ですとか、飯沼慾齋ですとか。江戸時代はこの地域は本草学の中心地でしたから、文献的には恐らく日本で最も充実している地域。問題は明治以降だ。 • 先ほど、歴史をきちんと踏まえるといいますか、過去をきちんとというふうな意見が幾つかあったが、私はちょっとそれには疑問を覚えます。これは基本的にできない。できないものはできないと認めるほうがいいと思います。できないものはできないんだと、やはりはっきりさせた上で、じゃ今後できるようにするにはどうしたらいいのかということをきちんと考えてほしいと思う。 • それから、環境教育については、教育というのは社会教育はもちろん重要だが、教育予算の9割は基本的には学校教育につき込まれている。学校教育はやはり教育の中で非常に重要な地位を占めている。学校教育の観点からいうと、現在の環境教育というのは非常におかしなところがある。 • 例えばここでも基本的に学校教育関係者というのがいない。真に環境問題に取り組める次世代の人間を育てるためにはどうしたらいいか。これはやはり重要な課題で、もしできることならば、それはぜひ組み込んでほしいと思います。
千頭	<ul style="list-style-type: none"> • 大分前に名古屋市守山区で学生に昔の地名、住居表示する前の地名をとことん調べさせたことがあるが、ほとんどが水にかかわる地名なんですね。水に起因をして生き物にかかわるとかですね。物の見事に環境、自然にかかわる地名でした。だから、少しそういう意味で、どこまでさかのぼるかという話もあるんですが、地名みたいなことも1つの切り口だと思う。 • また違う観点で、そもそもなごや戦略とは何のためにどうつくるのというのが、実は議論ができていないと思う。先ほど、「なごや戦略のめざすもの」というのが大きく、いわゆる生態系を守ろうという話と、ライフスタイルを転換していこうという話だというのは出てきたが、そういう意味でいけば、決して国家戦略の名古屋市版をつくるわけじゃないんですね。そこのあたりをどうやってつくるかということ。 • 例えば、しみん検討会議、あるいは市民有志との協働プロジェクトというのが上がっているんだけど、ここと例えば専門家会議との関係性はどうなるんだろうかというご発言もあった。「なごや戦略って何なの？」というのをある程度共通認識を持っておかないといけない。個々の話はいろいろあって、ネタはいっぱい転がっていると思うが、2年後になごや戦略ができましたと市長さんが記者会見をして、3年後

	<p>はどうなるかといったら、何も変わらないのでは、せっかくなつくつた意味がない。戦略は何なのか。国ならば方針というか、基本的な計画だろうが、名古屋でつくるといのは、極端にあるのは、ある意味では行動宣言という言い方ができるのかもしれない。行動宣言かもしれないし、あるいは2年間ここまでやりましたよ、既にここまでやりましたよということの中間の節目というふうな言い方もできるかもしれない。個々の議論を進めていって、ふと戻ったときに、私たちは何を指して動いているんだろうというのがうまく共有できていたほうがいい。それは必ずしもこの十数名のメンバーで共有することだけではない。名古屋は夜でも220万人いますし、昼間は270万人ぐらい多分いるのではないか。国勢調査だったら250万人ぐらいですか。250万か270万人の市民がいるわけで、流域圏、木曾川、庄内川等の川の流域もありますし、環伊勢湾、周伊勢湾というふうな流域もある。だれがこれをどうつくって、何のためにというあたりを、もう一度次回議論しておいたほうがいいと思う。</p>
<p>広田</p>	<ul style="list-style-type: none"> この日本の戦略を見ている、結構あいまいな表現が多くて、痛みを伴うようなものは、一番下の数値目標例に少しあるぐらいですね。あとは結構抽象的なものが占めていると思います。 この席で痛みを伴うような戦略を立てるのはなかなか難しいと思う。千葉県がとても参考になると思うが、大変かもしれないけれども、タウンミーティングを徹底してやっていく。各区町にイニシアチブを持ってもらってもいいし、区や町内会や教育委員会でもいいし、PTAでもいいし、子供会でもいいし、そういったところでどんどんミーティングをしてもらって、みんながおのずから、これは痛みを伴うけれども守らなきゃいけないというものが出た場合、名古屋市としても堂々とこれを数値目標として上げましょう、なぜならこれだけタウンミーティングを重ねた実績で出てきた案です、皆さん理解してくださいということが言えると思う。ミーティングを開いていくノウハウというのは市民にも十分ありますし、そうしたみんな参加、市民参加型で戦略を決めていくというのが大事だと思う。
<p>新海</p>	<ul style="list-style-type: none"> 経済市場原理にどうやって乗せていくかというか、その部分にどう関与するかということが一番の基本かなと思う。でも、非常に難しいことではあるが、50年後、100年後を見据えたときに、今から準備をしなければいけない。私はこの地域の物づくり産業というのは物すごく勢いがあると思っており、中小企業の方とかJCの方とか、商工会議所の方と、少し遠い将来を描きながら、今の自分たちの商売というか、ビジネスのあり方をどうしていったらいいのかということ共有する場が必要と思う。 最初のスタートのときに、ここには企業の方がいない。いかに巻き込んでいくか。そして、2010年のときに、自分たちでつくった自分たちをチェックできるようなものをつくっていけるかということが試されているのではないかな。企業の方々にとってもメリットになり、市民の消費行動がそれによって変わり、社会システムも変わり、経済も少しずつベースが変わっていくような戦略にしたい。
<p>広田</p>	<ul style="list-style-type: none"> 今新海さんがおっしゃられたように、企業が払う痛みが痛みじゃなくなるような仕組みを行政や市民が作れると思うんです。これはメディアの方に協力していただいて、ちゃんと褒める、環境に貢献した企業が損をしないような仕組みをちゃんと市民が支えていく。これが、もしかすると生物多様性市長賞とか何かそういう賞をつくって授賞式があってもいいかもしれないし、それをメディアが大々的に取り上げて、企業のイメージがアップしたり、売り上げが伸びたりだとか、そういう痛みじゃないものをメリットに変えていくという工夫も必要かと思った。
<p>安田</p>	<ul style="list-style-type: none"> 皆様のすばらしいご意見をいただきまして、私も感想を述べさせていただきます。 まず、この検討の流れというのは、1つは、過去から始まって現代へ至り、未来を囁くという大きな流れをとっているということです。これは、ヨーロッパやアメリカの人々がやっている未来予測とは全然違う方向をとっている。スウェーデンで始まったバックキャストという方法があるが、これは20年先をまず頭で考える。妄想して、そしてその20年先のこういう社会をつくるためにはどういう法律をしたらいいか、どういう社会システム、どういうことをしたらいいかということこれからやりましょうというのが大体世界の大きな流れだ。私たちはそうではなく、まず過去から現代を見て、未来をやりましょう。つまり40年前に生物の多様性があつた社会、これをどう未来に還元するかという、これが我々の1つの大きな、ここに出てきた戦略で、非常にユニークな戦略であると思う。

- ・ こういう方法を私たちは今「逆ビジョン」といっているが、私たちが40年前にコウノトリがいた時代、その時代の生物の多様性をどう未来に還元するかということが、我々に課された1つの大きな課題だと思う。これは、我々はすばらしい過去を持っているからそれができるのであって、高度経済成長期以前に生まれた人間にとっては、そのすばらしい生物多様性を実際に生きている。現実生きた過去を未来に還元するというほうが、あくまで20年先の社会を妄想してこういう社会をつくらうというバックキャストイングの方法よりも、より現実味があるんじゃないか。それをここでやってみよう。だから、世界の流れとは全然違う方法をやっていると私は思います。これは、ある意味ではユートピアを求める方法ではなくて、桃源郷を求める方法です。経済をスローダウンしないで、過去の桃源郷を未来にどう還元するかということをお話を聞いていて感じた。
- ・ それから2番目は、ここの検討事項の中で抜けていることが1つあります。それは、生物多様性を守ることがいいことなのか。雑草がいたり、蚊がいたりするじゃないかと、害虫がいるじゃないかと、それがいいことなのかどうなのか。なぜ生物多様性を守ることが人間にとってプラスになるのかということです。これは最近の事例を申し上げますと、カエルの声から非常に高い高周波が出ていることがわかりました。その高周波が、いざ人間の脳に大変大きな影響を与えているということが最近注目されている。人間の耳は20KHzしか聞こえないが、森の中の鳥の声であるとかせせらぎの音、こういったものが100KHz以上の高周波が出ていて、その高周波が人間の脳の脳幹という部分に大きな影響を与えて、それが脳内物質の分泌に深くかかわっているということがわかってきつつある。我々が生き物に囲まれて生きているということは、実は我々の命を輝かせるということに深く関係するのではないかというのが見えてきた。
- ・ だから、生物の多様性を守るといって、例えばもう1つ雑草の問題があるが、昔はこんなものはないほうが良いといって除草剤をまいた。ところが、実際はダイオキシンという大きな問題がある。ダイオキシンはごみを燃やすことから出るなんてみんな思っていた。それで、大きなごみの収集、高い煙突をつくってダイオキシンを防ごうなんて思っていたわけだが、実際ダイオキシンはどこから出たかといったら、除草剤から出た。だから、その除草剤を浴びて我々ががんになったり、DNAを破壊している。つまり、それよりは雑草に囲まれて生きたほうがよほど幸せなライフスタイル。
- ・ もっと極論を言えば、これから2050年、人口が100億に達しようとしている。100億に達しようとしている人口、これで我々は今困っているわけですが、そのスタートは何か。マラリアを撲滅したDDTから始まるわけです。これで人口爆発が起こるわけですね。だから、人類にとっては何が幸せか。むしろマラリアで多少人口が減っていくほうが、本来は人類にとっては幸せかもしれない。
- ・ ですから、この委員会の中にぜひお医者さんを入れてくれと僕はお願いしたんです。つまり生き物によって囲まれているということが人間の生命の活性化にどんな影響を与えているのかということこれから研究しなきゃいけないわけですが、そういうことを研究している人が名古屋には余りいないと言われて、私はあきらめが、今後こういった問題をぜひとりあげていただきたい。
- ・ 名古屋はなぜ中小企業が繁栄しているかということ。実は名古屋の豊かな自然環境の中に、中小企業の物づくり、物づくりというのは命を吹き込むことですから、生き物とどう接しているかということと深い関係があるかもしれません。だから、そういう点をぜひ今後検討の中に入れていただきたい。
- ・ 最終的には、この生物多様性の問題というのは、文明史的な闘争だ。現代の文明というのは人間と家畜だけの世界をつくってきた文明だ。それ以外の生き物を全部殺してきた。それが現代の文明のリーダーだ。その最終的にできたのがマーケティング、お金、金融至上主義といいますが、命というものを全く無視した社会、これで地球環境問題が引き起こされている。その流れを変えることができるのは、実は日本人だけだ。生きとし生けるものの命を見詰めてきたこの感覚を持っている。
- ・ そういう面で、この委員会というのは非常に大きな意味を持っている。今の人間と家畜だけの社会をつくってきた文明とは違う新しい文明社会をつくれるのは、ここから始まると私は考えており、これから2年間で、非常に大きな役割を皆さんは担っていただいているのではないかと思います。

5. 閉会

・座長あいさつ

	要旨
座長	<ul style="list-style-type: none">・ 今日時間が大幅におくれて申しわけないが、最後にタヌキの話で締めたい。・ 東京にもタヌキがいる。あるNHKの番組で一生懸命ディレクターが写真を撮っている。信号の前である女性が信号待ちしていた。そこへタヌキがやってきて、その女性の靴ひもをかじって、靴ひもを解いていた。それでも女性は全然気づかない。ディレクターが「今ここでタヌキがあなたの靴のひもをかじられましたよ」と言ったら「えっ」と言って、女性は恥ずかしそうに走っていく姿が映っていた。つまり、タヌキと出会うとタヌキの気配を感じられないほどに、我々は命というものを見詰めることに鈍感になってきている。・ 我々は知らないけれど、この名古屋市内にいっぱい生き物がいて、彼らは我々を見詰めている。恐らく蛇やカエルもみんな我々を見ている。でも、我々は見していない。その恐ろしさ。つまり、人間以外の他者の命を見詰めるということは、実は自分の命を見詰めるということでもあるということ。だから、生物多様性、生きとし生けるものの命、それをもう一度見詰め直してみよう。名古屋市民の人が自分の周りにどんな命があるかということ、それを見詰めるだけで、必ず新しい社会が、新しい文明の時代ができると思う。・ 今CO2ばかりが取り上げられている。排出権取引で、あれは金もうかる。あれによって日本は、これだけ蓄えてきた貯金、全部CO2の排出権取引でロシアや中国やヨーロッパに奪われていく。CO2が地球温暖化の原因であるかどうか、もっと検討しなければいけないと僕は思っている。それよりもっと重要なことは生物の多様性だ。生き物の命を我々が見詰める目をどう持つか。名古屋市民の人がそれを全員持てば、名古屋市はがらっと変わる。・ 長時間にわたりましてご参加いただきまして、有益なご意見をいただきましてありがとうございました。